迫害があっても助け主が共にいる

ヨハネ福音書16:1-7

【新改訳 2017】

16:1 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまずくことのないためです。
16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。
16:3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。
16:4 これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。
16:5 しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。けれども、あなたがたのうちだれも、『どこに行くのですか』と尋ねません。
16:6 むしろ、わたしがこれらのことを話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。
16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。

【祈りながら考えよう】

（１）主を信じないユダヤ人たちはなぜ主の弟子たちを会堂から追放し殺すようなことをするのですか。

（２）パウロは熱心なユダヤ教徒だったのになぜキリスト者を迫害したのですか。

（３）主が去って行くことは、どうして弟子たちにとって益と言えるのですか。

【解　説】

（１）「これらのこと」を話した理由

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまずくことのないためです。（1節）

当時の弟子たちは、ユダヤ人たちが一般的に持っていた希望、メシアが王国を樹立し、ローマに支配を打ち破るという希望を抱いていたに違いない。

ところが、主はこれから死んで、よみがえり、天の御父のもとに行かれるという。聖霊が来られ、弟子たちはキリストの証人として出て行くようになる。しかし、彼らは憎まれ、迫害を受ける。

そのようなことがあっても、彼らがうろたえないよう、つまづくことのないように、主はあらかじめ語られた。

（２）迫害する者たちが、神に奉仕していると思う時が来る

人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。（2-3節）

「**会堂から追放される**」ということは、大半のユダヤ人にとっては、起こり得る最悪の事態の一つに数えられた。しかし、イエスの弟子であった者たちにまさにそれが起こる、というのである。当時のユダヤ人としては、社会生活ができなくなってしまうこと、いわば村八分にされることである。

間違ったことをしているからいじめられるというのであれば、筋が通っており、正義という筋が一本通っている社会ということができるが、ただ「少数だからいけない」というのでは、確かにおかしい。しかし、残念ながら、この世においては、そういうことがまかり通っている。

キリスト者になった人は、まずそのことを覚悟しなければならない。キリスト者が多くならない限り迫害は続く。しかも、その迫害をしている人々は、自分たちのしていることは間違っていないと思っている。

主が「**実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。**」と言われた通りである。

（３）パウロの経験

このことは、パウロがキリストとの出会いを経験し、キリスト者になるまでにしたことを思えば、それが文字通り成就したと言ってよい。彼はキリスト者を迫害し、殺しさえした。彼はそうすることによって神に熱心に仕えているのだと本当に思っていた。彼自身、次のように証言している。

「**私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。**」（使徒22:3-4）。

「**パウロは、最高法院の人々を見つめて言った。『兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。』**」（使徒23:1）

キリスト者を迫害する人たちがいるのは、彼らが父なる神をも主イエス・キリストをも知らないからである。だから、その人々が「父なる神と主イエス・キリスト」を本当に知れば、パウロのように回心し、キリスト者になると期待できる。

パウロはキリスト者になる前に、キリストについてはよく知らなかったとしても、父なる神については知っていたのではないかと考える人もいる。

しかし、そうではない。キリストを通してでなければ、だれひとりとして父なる神を知ることはできない。これは、パウロも例外ではなく、彼は神に奉仕していると思いながら、全く見当違いのことをしていたわけである。

（４）その時が来たとき、あなたがたが思い出すため

主が弟子たちに対してこのことを話されたのは、なぜか。

「**その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。**」

自分たちの身の上に起ころうとしている迫害について聞いていた弟子たちの心は、悲しみでいっぱいになった。主イエスと別れなければならないということに加えて、「会堂から追放される」など、余りにも厳しい現実が自分たちの身の上に襲いかかって来ようとしていることを予告されたからである。

（５）弟子たちの益になるという約束

その時、この恐れと悲しみに震えおののいている弟子たちに、もう一度はっきりと「助け主としての聖霊」が来られることを約束された。

「**しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。**」

主が弟子たちのもとから去って行くことは、弟子たちにとって益だと主は言われた。なぜ彼らにとって益なのか。

まず第一に、主が地上にいつまでもおられたら、何か困ったことがあれば、主のみもとに行けばよいわけで、その点、とても便利かもしれないが、主がガリラヤにおられれば、ユダヤにはおられないわけで、ユダヤにいる人々はガリラヤまで行かなければならない。主は人間として地上に生きておられたから、時間と空間という制約の下におられたわけで、いつ、どこにおいても、すぐ主イエス・キリストの助けを得られるとは限らない。

もしも今日主イエス・キリストがパレスチナに生きておられたとしたら、私たちは困ったことが起きた時、一々ビザを取ってパレスチナまで行かなければならないし、緊急を要する時、国際電話で話をしようとしても、全世界の人が主に助けを求めるために電話をしていて、いつでも「話し中」で通じないだろう。

しかし、主は地上を去って、天の父なる神のみもとに行かれた。その代わり、聖霊の神が私たちの所に来て下さり、世界中どこにおいても、困ったことが起こった時、助けを求めれば、いつでもそれに答えて下さる。遍在される聖霊の神は、同時に世界中のキリスト者と共にいて、助けの御手を伸べてくださる。

それだけではない。主イエス・キリストは天の父なる神のかたわらにいて、私たちのためにとりなしていてくださる。いわば、父なる神と、子なる神、主イエス・キリストと、聖霊なる神が総がかりで私たちを助けてくださる。

私たちをこんなに大事にし、助けて下さるというのに、私たちがどうして悲しんでなどおられるだろうか。たとい迫害があっても、助け主が私たちにはついていてくださる。